

## アイヌの人たちと共に生きる

### 加賀伝蔵

「父さん、兄さん。ここが蝦夷なんだね。」

江戸時代後期の一八〇四年、羽後国（現在の秋田県）

八森で生まれた加賀伝蔵は、

十五歳のとき、父の徳兵衛

に連れられ、蝦夷地のクスリ（現在の釧路市）にやって来ました。徳兵衛は、場所請負人\*おいにんの下で働き、この地に住むたくさんのアイヌの人たちと仕事をし、伝蔵も父の仕事を手伝っていました。



【別海町加賀家文書館蔵】

蝦夷地はアイヌの人たちが暮らす土地であり、当然そこでの会話は全てアイヌ語です。そのため、アイヌ語が話せない伝蔵は、クスリに住む人たちと話ができませんでした。「何を話しているのか分からないけれど、この人たちのために私にできることは何だろう。」

そう考えた伝蔵は、場所請負人の食事を作ったり、事務

仕事の手伝いをしたりするなど、和人とアイヌの人たちのために、自分にできることに全力で取り組みました。伝蔵の働きを見ていたアイヌの人たちは、次第に伝蔵に声をかけるようになりました。しかし、伝蔵は、アイヌの人たちが何を話しかけているのか分からないままです。伝蔵の心の中で「自分の言葉で、この人たちと話がしたい。」という思いが少しずつ強くなっていきました。

そこで、伝蔵は、忙しい仕事の合間をぬって、アイヌ語の勉強を始めました。アイヌ語は、口承\*こうじょうにより伝えられるため、教科書や辞書などは一切なかったのです。伝蔵は、アイヌの人たちから、口伝えでアイヌ語を学んでいきました。その頑張り\*がんばりは、アイヌの人たちの中で「小使\*こづかい」になつていたメンカクシやムンケケの目に留まるようになりました。

「私たちの仲間のためにあれだけ仕事をしながら、私たちの言葉も勉強している。私たちも伝蔵に力を貸そう。」

そう感じた二人は、伝蔵に協力しました。ついに、伝蔵は、アイヌ語でコミュニケーションを取れるほどになりました。また、アイヌの人たちの仲間をたくさん得ることができました。

自分の伝えたいことが言えるようになったり、アイヌの人たちの思いが分かるようになったりした伝蔵は、センポウシ（現在の釧路町仙鳳趾）で番屋守、シヤクベツ（現在の釧路市音別町尺別）で止宿守、クスリで仮帳役などの仕事を任されるようになりました。また、通訳としてアイヌの人たちと和人をつなぐ役割も担っていました。その通訳の仕事で成果を挙げた伝蔵は、ノツケ（現在の野付郡別海町野付半島）の通行屋で通訳の仕事を任されることになりました。

ノツケでの生活にも慣れてきたころ、伝蔵の下に一人のアイヌの人が相談に訪れました。

「ここに住む人たちの中には、飢えに苦しんでいる人がいます。何か方法はないものか。」

当時、ここに住んでいる人たちは、魚、動物、山菜を食料としていましたが、食料の確保が安定しなかったため、困っていました。



「野付通行屋跡遺跡」  
〔別海町加賀家文書館蔵〕

そこで、伝蔵は、畑を開いて農作物を作ろうと考えました。しかし、野付半島は、日本最大の砂嘴で知られており、土地のほとんどは砂地であることから、農業には不向きな土地でした。

「何かできることがあるはず。」

伝蔵は、アイヌの人たちのために、あきらめずに考え続けました。そして、ノツケ周辺の土壌を調査し続け、野付沼内の山から良質な土を見つけ出しました。

伝蔵は、アイヌの人たちと協力し、山から良質な土を運び入れ、様々な種子を取り寄せ、開墾に努めました。その結果、最初の年から多くの収穫があり、大根、かぼちゃ、ニラ、芋、人参、なす菜などを十分に作る事ができるようになりました。伝蔵は、さらに畑として可能な土地の状況を調査し、オンネクル（野付半島中央部）の土地に畑を開き、二十七品種の作物を作りました。

この土地のアイヌの人たちの生活は、農業によって改善され、飢えに苦しむ人は、少なくなりました。

このような功績から、伝蔵は根室地方の農業の先駆者といえます。

蝦夷地にわたり、三十年。伝蔵の下には、たくさんのア

アイヌの人たちが慕<sup>した</sup>って訪<sup>れ</sup>れるようになりました。

そんな折、蝦夷地で恐<sup>ろ</sup>しい伝染病が広がりまし<sup>た</sup>。疱瘡<sup>\*</sup>という悪性の伝染病で、命を落とす人が相次ぎまし<sup>た</sup>。

幕府は、医師の桑田立齋<sup>\*</sup>や井上元長<sup>\*</sup>を蝦夷地に派遣<sup>さ</sup>せ、種痘<sup>\*</sup>をするよう命じまし<sup>た</sup>。

根室に着いた立齋は、すぐさま種痘を始めようとしまし<sup>た</sup>が、それは困難を極めまし<sup>た</sup>。

「そんなわけのわからないもの。」

「和人のことだから信用できない。」

アイヌの人たちは種痘を嫌<sup>い</sup>がり、立齋や元長のことを信用し<sup>ま</sup>せんでし<sup>た</sup>。さらに交通の状態が悪いということもあり、

種痘は進まず、た

くさんの人たちが

命を落としていき

まし<sup>た</sup>。

そのことを、聞

いた伝蔵は立ち上

がります。

元長の補佐<sup>やく</sup>役を

名乗り出て、種痘



「加賀家文書館（別海町）に展示されている伝蔵が残した史料」  
〔別海町加賀家文書館蔵〕

を嫌<sup>が</sup>ったアイヌの人たちの説得にあたりまし<sup>た</sup>。

ろうそくの火が揺<sup>ゆ</sup>れる薄暗<sup>うすくら</sup>い部屋の中、伝蔵の前にはたくさんのアイヌの人たちが座<sup>ま</sup>っています。伝蔵は、種痘の趣旨<sup>しゆし</sup>を伝えまし<sup>た</sup>。

「ここにいらつしやる元長先生は、悪い人ではない。種痘を行えば、みんなの命が助かる。」

しかし、アイヌの人たちにはなかなか伝わらず、

「いくら伝蔵さんの話でも、信用できない。」

「和人は信用できない。今まで、私たちにどんなひどいことをしてきたか。伝蔵さんも知っているだろう。」

という声ばかりが聞こえまし<sup>た</sup>。

そこで、伝蔵と元長は目

を合わせ、深くうなずきま

し<sup>た</sup>。

伝蔵は、左腕<sup>ひだりうで</sup>の袖<sup>そで</sup>をまく

りあげ、そして元長は、二股<sup>ふたまた</sup>

の針<sup>はり</sup>を伝蔵の腕<sup>うで</sup>に刺<sup>さ</sup>し込み

まし<sup>た</sup>。

アイヌの人たちは、目を

見開<sup>み</sup>き、その様子を静かに



「秋田県八森の海岸」  
〔別海町加賀家文書館蔵〕

見つめました。

袖を戻し、伝蔵は静かに口を開きました。

「私を信じてほしい。アイヌの人たちの命を助けたいだけなんだ。」

伝蔵の目には涙が光っていました。

伝蔵の必死の訴えにより、多くのアイヌの人たちの命が救われたのです。

一八〇四	羽後（秋田県）八森で生まれる
一八一八	蝦夷地（北海道）のクスリ（釧路）に赴き、仕事をしつつアイヌ語を習得する（十五歳）
一八三〇	根室に移った後に、ノツケ（野付）に住み、通辞役となる（二十七歳）
一八六〇	シベツ（標津）で通辞役の最高位である大通辞役となる（五十七歳）
一八六二	シベツ場所の支配人となる（五十九歳）
一八七四	秋田県八森で死去する（七十歳）

\*場所請負人：税金を支払う代わりに、その土地の交易権を得た商人

\*口承：口から口へと語り伝えること

\*小使：アイヌの人たちのリーダー「乙名（おとな）」のもとで、号令を発する役を担っている

\*番屋守：漁業をする際に、漁場の近くに作った作業場兼宿泊施設を守る役職

\*止宿守：宿屋を守る役職

\*仮帳役：帳簿を取り扱う役職

\*通行屋：官営の旅館

\*砂嘴：半島に続く砂の堆積によってできた低平な細長い

#### 地形

\*疱瘡：感染症の一つ

\*桑田立斎：江戸時代の医者であり、江戸幕府に採用され、蝦夷の各地を巡回し、アイヌの人たちに種痘を行った。

\*井上元長：江戸時代の医者であり、桑田立斎の門弟として仕え、アイヌの人たちに種痘を行った。

\*種痘：疱瘡の予防接種